

ワークショップを了えて

Conclusion

北原 糸子 (神奈川大学 21 世紀 COE プログラム)

吉越 昭久 (立命館大学 21 世紀 COE プログラム)

2006 年 8 月末に開催した立命館大学と神奈川大学のジョイント・ワークショップは、はじめての試みとしては成功裡に終了したといえると思う。日頃はそれぞれのテーマに即した研究事業を行ってきたが、機会を得て「歴史災害」と「都市」をキーワードとして公開のイベントを行った結果、より広い研究上の連関が見えてきたのである。当日の報告に基づく原稿について、以下に主催者としての簡単なまとめを行なうことにしたい。

I 「都市の歴史と災害復元」では、立命館大学 COE に属するメンバーによって、京都の平安時代から江戸時代までの災害について、考古学、歴史学、地理学の方法による分析成果、および京都の都市景観を 3 次元 GIS 技術で開発した「京都バーチャル時・空間」が披露された。京都の考古学発掘では、平安京に焦点を絞った河川洪水による環境変化と土地利用の推移の実態が明らかにされ、同じく平安京を対象としつつも、資料データベースから水害、火災などのいわば季節性をもった災害と御霊祭を対峙させ、これらの量的な操作から御霊会を「防災行動」と位置づけるという目新しい視点が打ち出された。また、公家町の火災と地震災害の対応策について、慶長・寛永期を除く宝永以降の内裏造営は、すべて火災に起因した造営であり、道路拡張、明地の確保、敷地の拡大など、破壊消防が防火対策の中心であった時代の普遍的な対策がこの時はじめて組織的に採用された史実が明らかにされた。続いて、幕末の開国問題に国論が沸騰するさなかの内裏炎上問題が論じられた。ここでは、内裏造営に伴い、京都市中に発生した治安、経済対策など、復旧、復興に伴う問題の広がり指摘された。また、立命館大学の歴史都市防災研究の集大成として、これら歴史災害の分析成果を 3 次元「京都バーチャル時・空間」に組み込み、防災に役立てようとする試みが明らかにされた。歴史的な都市が GIS 技術を駆使したデジタル技術によって蘇り、且つそれぞれの学問のもつ成果を「防災」という 1 点にむけて、収斂させようという一貫した方向性が追究されていることが感じられた。

II 「関東大地震と社会」では、東京が経験した過去最大の地震災害について工学、歴史学、社会学からのアプローチが報告された。すべての報告者が必ずしも神奈川大学 COE として日常的に共同研究を遂行している仲間ではないが、関東大震災が歴史的災害ではあるものの、いまなお現代にもたらす教訓の多い災害として、あらゆる側面から見直されなければならないことが明らかにされた。

まずは、工学的な研究成果の上に写真などを組み合わせたデータベースの構築例が報告された。また、

当日は報告発表はなかったものの、本報告書では、写真データベースの一部を担う東京都慰霊堂保管の関東大震災の写真類の分析が追加発表されている。ついで、関東大震災の救援について公刊された当時の記録では明らかされ得なかったがようやく今に至って明らかにされる事実が多々あり、その事例が紹介されるとともに、これまで隠されていた事実をいかにして明らかにしていくのかが関東大震災という近くて遠い災害の課題でもあることが指摘された。震災後の社会を読み解くにはどこに視座をおいて進めれば歴史と社会の動きを捉えることができるのか、社会的アプローチの可能性が示された。

Ⅲ「歴史災害と現代」は、災害を読み解く歴史防災学、文化財資源学、民俗学分野からの発表である。まず、太平洋戦争末期の災害のため、記録資料が決定的に不足しているという研究上のハンディキャップを、聞き取りを絵画に仕立てるという過程を通じて、災害を復元する方法を開発した三河地震の事例が報告された。

次いで、一見、文化財と災害とは距離があると考えられがちな領域であるにもかかわらず、災害痕跡を含む天然記念物は日本列島の自然環境においては少なくないこと、また、それらは単なる自然災害もたらした結果としてだけでなく、地域の人々の生活文化に深く関わってきたからこそ、人と自然の関わりの深さ、広さ、豊かさを示す文化財としての価値が認められるものであることを数多くの事例で示された。

また、日本列島に分布する棚田地帯の多くが地すべり地帯であるという事実から、棚田の維持には実は日常的な「災害」である地すべり対策の知恵が活かされる新潟や高知の村の紹介がなれた。ここでは、前2部の災害事例がどれも都市、それも大都市における大規模災害を対象としているのに対置して、村の日常的な災害がもつ社会的意味を問うことを提起したものであった。

ワークショップの最後に、シンポジウムの総合討論が行なわれた。ここでの論題のひとつとしては、防災という視点が掲げられているが、過去の歴史災害から現代都市に活かせる防災の知恵は生まれるのかという厳しい質問や、いやだからこそ、過去の事実を正確に捉える努力が必要だという指摘などがあった。

上述の論考のまとめで明らかになったように、歴史災害の実態も復旧や復興という視点に立ってみると、立命館大学 COE においては、近世までの京都の場合においてこれまで解明されて来なかった事実が「防災」という視点を設定することで異なる学問分野が共通に取り組む目標となり、明らかにされた事実や新しい領域の可能性が浮かび上がるという成果を挙げている。また、近代以降の歴史においては、むしろ明らかにされ得ない状況が今に至ってようやく払拭される時が到来したことが関東大震災の事例から指摘された。防災についての具体的なアプローチが見られないという指摘に対して、わたしたちの立場からすれば、まずは事実の解明が必要だということだ。その上で、異なる学問分野が共有できる問題設定をすることで、新しい領域を開拓できる可能性があるということが確認できたことをこのジョイント・ワークショップの成果としたい。